真剣で青春を謳歌したい！

月と太陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真剣で青春を謳歌したい！

【Ｎコード】
Ｎ９８６６Ｗ

【作者名】
月と太陽

【あらすじ】
青春を謳歌したい少年の物語。

第一話　青春の夢に忠実であれ。

住めば都――――いや地獄も住家かね……。

古くから伝わる諺、よく言ったものである。先人のお言葉はいつでもとても偉大だ。

確かに人は慣れる生き物。この一年間という月日の中で嫌というほどに心底その事を身を持って体験させられた。……実体験って大切だね。

真剣で青春を謳歌したい！

第一話

青春の夢に忠実であれ。

心胸踊るはずの入学式当日。晴れて川神学園と呼ばれ日本各地に

散らばる武士の血統を受け継ぎし人間達が集う、なんて触れ込みのトコに無理やり収容された。

仕方が無いと言えばそうなんだけど、ハッキリ言って来たくなどは無かった。

理由は至極簡単。———人外、化物が沢山いるよと多方面で散々噂される色物学園だからだ。

でも家庭の事情で追い出されたこの身です。御本家様の意向に背ける訳もなく、ドナドナという背景音が聞こえてきて、引きずられながら連行されてきましたよ。

現実は———最高でした。

美人が多い、可愛い子が多い＝最高。

幸せだった、最初の一日目は……。

入学式の翌日、この学園で青春するぞーと意気込んでいた俺は変態橋と呼ばれる橋の上で———本当の現実を突き付けられました。

季節は巡り巡って春夏秋冬。

一周一年回りまた桜の花弁が舞う今日この頃。

教壇の定位置にて偉そうな担任様は新しい学期を迎えても変わらぬご高説を一人垂れ流している。

迫っ苦しい教室に寿司詰めにされた奴隷……もとい生徒達は一心不乱に机に向かって勉学に励み勤しんでいたのであった。

――とまあそんな一団に混じっている俺がどうこう言えた義理じゃないけどさ……。

窓際の席をこの手中に納めて早一年。退屈極まりない授業を聞き流しながら窓の外を眺める、澄み切った青空に爛漫に輝く太陽。ああ、いい天気だ。

こんな日は外に出て体を動かしたくなる。

――グラウンドには日向ぼっこに勤しむ野良猫が一匹。のんきに欠伸をして体を伸ばしてだらけてやがる。

くそぉ、いいなぁ。死んだら野良の猫になって自由に生きていきたい。……いや金持ちマダムに飼われる猫のほうがいいかな。ゴージャスな生活で不自由しなさそうだ。

「――これ、明智。麿の話を聞いておじゃったか？」

……はいはい。少しばかり意識を飛ばしすぎていたか。

「……綾小路先生。当たり前じゃないですか先生のご高説を聞き流すなんてありえませんよ。（たく、顔面白塗り似非公家が）」↑満

面の笑顔

「そうかそうか。すまぬな明智。疑ったりして、の」

「いえいえ。（面倒な教師だな本当に、こいつ自尊心だけは異常に高いんだよな）」↑満面の笑顔

「うむ。では続きといこうか、の。明智は座ってよいぞ。――――平安時代の」

はぁ終わったか……。今日一日授業が恙無く終わるまでいつも通りダラダラと過ごしますか。

「こんちわーす」

「おお明智か。バッキャロー、今日もレジ打ち店員、宜しく頼むぜ」

店長の毎度の失礼な口癖を華麗にスルーしながら人目につかない場所にある休憩室兼更衣室にそそくさと入る。

ここは金柳街に店を構える川神書店。なんでこんな所にいるのかというとあれだ。バイトです。学生は色々と入用なので。実家から振り込まれる金だけじゃ足りんのです。

店から支給された青色のエプロンを掛けて、今日もまた新たな戦

場に向かう。

「今日も勤労に勤しみますか……」

「――――ありがとうございましたー」

そろそろ時間だ。店内に設置されて時計を見るとピッタリ午後八時を指し、バイトの時間の終わりを告げていた。

「お疲れ様だ、バッキャロー。今日はもう上がっていいぞ」

「はい、お疲れ様でした」

今日も一日勉学に仕事にと打ち込みましたなー。

休憩室にあるタイムカードを忘れずに押して自分に割り振られたロッカーを開ける。鞄と貴重品を取り出し、エプロンも忘れずに片付けてっと。

「店長、お疲れ様です」

休憩室から出てカウンターの後ろの椅子に座る店長に挨拶。

「お疲れ様だバッキャロー。おい明智――――これでジュースでも買ってけ」

そう言うと五百円玉をポーンと投げて寄越した。キャッチ&リリースはしない。

「――――ゴチになります」

ガタゴトと音を立てて缶を排出する自動販売機なるもの。その下腹部より所望した品を取り出す。プシュとプルタブを開けると炭酸のいい音が。

「ゴクゴク」

やはり炭酸飲料水はいいね。人類が産み出した文化の極みだ。

なんて下らない三文芝居を頭の中で思い描きながら帰宅への途についていた。

暗く辺りを闇に支配された土手の河原。街の街灯が頼りの帰り道。

そんな逃げ場のないロケーションの中――――あまり出会いたくない奴に出会ってしまった。

「――――はぁ、はぁ、はぁ」

最初はジョギング中の通りすがりだと思い、気にも留めていなかった。しかし、近くに寄ってくると段々と何処かで見たことのある

シルエットが遠く暗闇から浮かび上がってきた。

……って真剣かよ。

「――こんばんわー。って明智君？」

「……こんにちは。――川神さん」

栗色の髪を赤い髪飾りでポニーテールに纏めた女の子。無駄に年がら年中元気な彼女はあまり得意タイプの人間じゃない。まあだからといって嫌いな子ではないのだけれども……。

「こんな時間までバイトかしら？お疲れ様」

「……うん。どうもありがとう。川神さんも気をつけてね……それじゃあ」

あの川神百代の妹じゃなかったらな……。仲良くしたいけどさ――サヨナラ。

戦う

道具

逃げる←

（当たり前だ、逃げるを選択！）

――ダメだ！逃げられない！

（何だと！）

「……あのさぁ、ずっと気にしていたんだけど。もしかして明智くんは私の事嫌いなの？」

「えっ。ど、どうしてそんな事を突然聞くのかな」

うう。泣きそうな顔をするなよ。俺が泣きそうだ。君の姉に泣かしたなんて知られた日には、ブルブル。恐ろしや……。

「だって何時も私と会っても直ぐに何処にかに行っちゃうじゃない？だから私の事嫌いなんじゃないかって……」

そりゃあんな化物の近辺の人間となんて知り合いにもお近づきにもなりたくないからね。あの馬鹿は仕方ないとしても。バイト仲間だし。

「私、明智くんに何かしたかしら？知らずに何かしてしまったんなら謝るわ。だから――」

「――川神さん」

「……うん」

「まあ一先ずジュースでも飲んで落ち着いてよ。喉渇かない？奢るよ」

餌で釣ろう。それしか思い浮かばない。苦肉の策だが他に何もないぞ……。

「……（キラキラ）」

あ。眼が輝いてる。

「明智くんはいい人ね！それじゃあ遠慮せず頂くわ！」

ってそれは。

「グビグビ」

……手に持っていた缶を強奪された。あれは……。

「っぷはー。ご馳走様！」

――――俺の飲みかけだよ……。

第二話　時間がやわらげてくれるような悲しみは一つもない。

今日もアイツはやって来る！

誰彼にも平等に試練を与えていくのだ、一切の妥協もなく。

そして無慈悲に今もまたこの俺も見逃さず蹂躙する。

そう――――月曜日という悪魔が――――。

真剣で青春を謳歌したい！

第二話

時間がやわらげてくれるような悲しみは一つもない。

「……」↑死んだ顔

ああ布団から出たくねぇ。いや割と真剣で。

眠い、何故この世界は一日が２４時間しか無いのだろうか。

足りなくね、絶対的に。せめて４８時間位はほしいね、うん。

そうすればバイトが終わった後にダラダラと出来る。ゲームやネットサーフィンやらやりたい放題……あれ、でもそうなると授業とかの長さやら時間の概念とか色々と変わるんじゃね。一時間が１２０分になったりしたりして――――。

――――って何してんだろうか私は……阿呆らしい、さっさと着替えて学校に行こう。現実に目を向けて頑張ろう、遅刻とかは勘弁だ。

六畳一間家賃月３万風呂トイレ付きのボロアパートの一室である我が牙城を出発し見慣れた歩道に踊りでる。

この時間は流石に登校中の学生でごった返していた。コイツら全員同じ川神学園に向かう途中である。マンモス校としても有名な学園近辺ならではの風景だ。

……はぁ今日もまたあの場所を通って行かなくてはいけないのか。嫌だなぁ。

あの橋を迂回するとなると時間の掛かりが２０分と違う。自慢じゃあないが俺は朝早く起きれる自信など一欠片足りともあるはずもなく、妥協してこの通学路になっていた。

通称変態橋。

名前の通り変態が通ることで地元で有名な橋である。

といってもモノホンのアッチ系ではなく、化物や怪物的なニュアンスの意味の変態と付け加えておこう。……偶に本職さんもお出になるらしいがな。

ほら橋の方から段々と喧騒が近づいてくる、いや俺が近づいているんだけどね。さあやって来ました変態橋。今日も変わらずやってるようです。

うん？おおなんと今日は橋ではなくその下にある河川敷でやらかしておられるようだ。ラッキー、これなら何があっても巻き込まれる心配はナッシング。せいぜい橋の上から歩きがてら鑑賞とでも洒落込みますか。ふふふっ対岸の火事ならば面白い見世物なんだけどな……。

この間は確かは人間おはじきだったけど、遠くから見るに今日は気分的に人間テトリスらしい。そんなこんなで鬼神が現代の化石と称される暴走族という種族をボコボッコにしていく様が観戦できた。

一瞬で空高く舞う男達。周囲の観客から、待ってましたと言わんばかりにドッと歓声が沸き起こる。観客の多くはうちの学生だ。この異常な光景を目の辺りにして歓声を浴びせるなんて神経がどうかしているとしか思えない。

……毎日同じ事が繰り返されれば慣れるのだろうけどさ。だとしても限度ってモノがあるじゃん。あれじゃあただの嬲り殺しだろ。武神と名乗る人間にしては品のない行動だ、まるで遊び足りない餓鬼じゃないかよ――――。

ぼうっと眺めていたらいつの間にか人間の塔が天高く積み上がっていた。ホントにやりやがったのな関節外したりして器用にテトリスを構築したらしい。……容赦ねぇ。

いや桑原桑原、あんな危険人物の関係者になりたくはない、絶対にお断りします。ノーセンキューです。

あっ無残にも積み上がった男達が回し蹴りで吹っ飛ばされた。合掌。

――――そろそろ遅刻だな。さっさと我らが学び舎に行きますか。

……知らない、何処からか微妙に殺気が混じった視線を浴びせられてるけどきっと俺に向けてじゃあ無いな。そうに違いない。さあスタコラサッサと歩きましょう。いやあ今日もいい朝だねぇ。ＨＡ

ＨＡＨＡ。

「……」

「――姉さん？どうしたの？」

「ああいや何でも無いぞ、弟よ」

今の気配……誰だ？今まで一度も感じたことのないモノだったが――。

「……んっ！？待て待て群衆に見慣れぬ顔を発見！」

おおカワユイ娘を発見！こうしてはおれん！突撃！

運命の歯車は未だ、嵌らぬまま物語は幕を上げる――。

街灯の過細い明かりが照らす公園のベンチ。そこで川神さんと二人で新たに買ったジュースをグビグビと飲み合っていた。

「――静岡の帰り道……」

なんとこのブルマのお嬢さんは今しがた静岡までひとっ走りしてきた帰り道だと仰っておるのです。凄いとしか言い用がないな、その根性が。

「うん。結構いいトレーニングになったよ。でもまだまだ」

メラメラと瞳を燃やして握り拳を掲げるブルマ、やっぱりこの川神一族は全員化物だなーと思い知らされる。そこにシビれる憧れ無い！

……だからって無茶苦茶だろうが、川神市から静岡ってどれ位の時間がかかんだよ……。

「――あんまり無理な運動は控えた方がいいよ。無闇矢鱈に走りこむのが効果的なトレーニングでは決してないからな。自分では知らない内に体には負担が掛かっているものだから、ちゃんと帰ったら湯船にゆっくりと浸かって筋肉をほぐす。キチンと寝る前にストレッチを欠かさないほうがいい。クールダウンを忘れずに。ああ、あと疲労・炎症を取り除くアイシングも大切――」

「おおおお」←キラキラと目を輝かせてる

「っあ」

やってしまった。糞、余計な事をペラペラとこの口は……。

「――明智君って凄いのね！もっと色々と教えてくれないかしら？スッゴイ興味あるよ私！！」

……自業自得だなぁ、でもこの娘を見てると昔を思い出してお節介を焼きたくなるんだよな、何故か。

「――ねえ！ねえ！聞いてるの明智君！」

――そうか、似てる、のか。

……忘れる事なんてできる訳無いのにな。俺って本当に馬鹿だよな。未練たらたらじゃあねぇかよ。我ながら女々しい男だのう。

「はいはい。何がご所望でございますか？お嬢様？」

何だかんだ言って俺も楽しんでいるのかね……やっぱり。

「えっとね、効果的なトレーニングとか、効果的なストレッチとかを知りたいです！」

――おい、効果的なって言葉気に入ったのか……。

第三話　すべての不幸は未来への踏み台にすぎない。

人とは過ちを犯して成長する生物である。

これはある有名な人物の言葉だ。

確かに俺もそう思う。仕様がないんだ、だって失敗は成功の素って言うだろ？

だからあの川神妹と知り合いになったとしてもそれは仕様がない。

———まあ、ある有名な人物って言うのは俺自身のことなんだけどね。だって自分自身の言葉が一番当て嵌まるじゃん。なんていったって自分の事だし。

真剣で青春を謳歌したい！

第三話

すべての不幸は未来への踏み台にすぎない。

川神学園。そう呼ばれる校舎の廊下を一人早足に歩いていく男子学生。人の波をかき分けて先に進む。

物凄く嫌な予感が脳内レーダーにビンビンに反応したため、いち早くあの場所からの即時撤退を測った。

その甲斐あってか此処まで何事も無く平穏無事にたどり着けていたのであった。

２年のＢ棟、そこのＡクラスがこの明智光臣が席を置くクラスである。

私立、川神学園。

川神市の代表的な学校で、個性を重んじるための自由な校則とユニークな行事・授業が特徴的。レベルはまあそこそこで生徒数は多い。

中間試験は存在せず期末が勝負となる。土日は休み。アルバイトＯＫ。

他に、この学校の特長として、”決闘”システムが挙げれるが――それはまた後述。

川神学園にはもう一つ昔からあるめんど臭い風習があり、その一つに特進クラスであるSクラスの存在が挙げられる。

まあ読んで字の通りSな連中の集まりだ。勿論SMのSじゃあ無いぞ？スーパーなSだ。

そして俺のAクラス、何となく展開が読めた人が多いだろうがこのクラスはSを目指す連中とSから脱落した連中で主に構成されております。

……俺がこのクラスに在籍する理由。

勉強に集中する人間が多いためのとても静かな快適環境、そして一応本家からの条件として粗末な成績は許さないとのお達し。

その二つが同時にクリアできる場所で在るためだ。

ぶっちゃけ余りAクラスである必要も無いんだけど最初の入学式で割り振られたクラスの為、進級時に一々申請して他のクラスに移動するのも面倒だからといった理由があったりもするんだけどそれはまあ置いておいて。

「……（ああ、しち面倒臭い奴に遭遇してしまった）」

何故突然回想に入ったかというと今、目の前にそのSなクラスの

住人が居るわけで……。

「――貴様、明智光臣とかいったかのう？」

こいつって確か不死川家のご令嬢だよな……。着物着てるし。

真剣な顔つきで腕を組み仁王立ちする身長１５８センチの不死川心。

――はっきり言って全く威圧感を感じません。逆に愛らしくて可愛いと思います。

「お主。あの明智家の家柄の出であろう？何故未だにＡクラスなどという二流クラスにおるのじゃ」

「……えっと不死川さん。確かに俺は明智家の血縁だけど本家の人間じゃあないんだよ。だから――」

「――だから何じゃと言うのじゃ。名門不死川家と同じ位の家柄であろうお主がＡクラスなどに居られると此方の品格が疑われるかもしれぬ。それはお主にも言えるであろう？」

このお嬢様は時と場所を考えないなぁ。こんな目立つ廊下の真ん中で他のクラスを堂々と貶すんだもん。さっきからスゲェ敵対的な視線を至るところから貰ってるんだけど……。

「あはは。でも別に誰も不死川さんと俺を比べたりしないと思うけどな。だってそんな事を知ってるの一部の人達だけじゃないかな？」

どうだ。正論だろ？何せ俺が明智の家柄なんて誰も知らんし。つーか、んな事誰も気にしないよ。そこまで一般人には有名じゃないしね、明智の家は。影から支配すんの好きだからなうちの家系って……。

「……ふん。今日の所はコレくらいにしておこうかの。そろそろＨＲが始まってしまう時間じゃ。――――ではな明智、此方の言葉しかと胸に留めて置く事じゃな」

……自分が言いたい事だけ言ってズンズンと去っていくおチビなご令嬢。つーか何処から俺が本家の血筋であるの嗅ぎつけてきたんだ？あの言い様だと裏も取れてんだろうな。

「はあああぁ」

この間は川神妹に接触され、今度は不死川のご令嬢かよ……。何か二年生になった途端色々と面倒臭くなってきてねぇ？身の回りが一気に騒がしくなってきてる……。溜息が出んのも仕方ないだろう、コレは。

……さあ、また何時もの日常が繰り返される。退屈なＨＲ、退屈な授業、でも退屈は嫌いじゃない。だって楽だから、享受する事は楽だ。求め手に入れるのは苦行であり大変だが。勝手に湧いて降ってくる退屈は楽で心地いい。

この学校には非日常は何処にでも転がっている。

だがそんなもん要らない、必要ない。

武神と関わりたくない、九鬼の家とも関わりたくない、川神院とも関わりたくない。

それがベストだ。俺にとって。

なのに少しずつ俺は非日常に引きこまれている、いや飲み込まれている。

……川神一子。あの娘は何処か昔の――――に似ている……。

――――シリアスなんて似合わねーよな……。よし切替るぞ、まだ一日は始まったばかりだ。

――――昼休み。

所変わって戦場（食堂）。

学食組が自らの血肉を削ってその糧にありつこうとする悍ましき場所である。

「オバちゃん！俺は醤油ラーメン！！」

「私はカレーライス！！！」

「オラオラ、てめーら退けよ！おばちゃん唐揚げ定食一つ！！」

「おいガクト！俺を踏み台にすんじゃねぇ！！！」

まさに死屍累々だな。まあ対策済みの明智さんには全く関係無いけど。

戦場を横目に通りすぎて上履きのまま外に出る。

「すいません。お姉さん。何時ものお願いします」←微笑を絶やさず。

「あら！明智ちゃん。はいはい、少し待っていてね」

そうして食堂の裏口から顔見知りの学食のおばちゃん、もといお姉さんを呼ぶ。

一年生の頃からコツコツと声を掛け少しずつおばちゃん連合と知り合いになっていき、今では優先的に学食を融通して貰っていたりする仲だったりする。

「はいお待たせ、今日のオススメ定食だよ」

「ありがとうございます。今日もまた一段とお綺麗ですね。お仕事頑張って下さい」↑微笑を絶やさず。

定食の代金を支払い、常套句のお世辞を言って食堂に戻る。未だに注文のカウンターには死者共が大勢蔓延っていた。

ガラガラの席に座って備え付けられている大型液晶テレビに目を移す。お盆に乗っている定食、メインのおかずは焼き魚。醤油を垂らして割り箸を割って、いただきます。食べ物には確りと礼を尽くしましょう。

昼にはニュースを見るならテレビも許可されている。まさにフリーダム。

『それでは次のニュースです。昨日午後7時頃、埼玉県深谷市の飲食店で無銭飲食をした男が男子学生に取り押さえられました。調べによると、男は今までも近隣で無銭飲食を繰り返しており、また窃盗品を身に付けていたことから警察では余罪を追及しています』

ふーん。学生ね、勇敢なお馬鹿さんもいたもんだな。相手が凶器とか持ってたらどうしたんだが、まあうちの学園には学生でも強いのがゴロゴロいるけどさ……。

『男を取り押さえたお手柄の男子学生は、神奈川県川神市在住の風間翔一さんで、限定メニューを先に注文されて腹が立っていたので本気で追いかけたと……』

「ぶっ！！」

「おいあれキャップじゃねぇか！！」

「風間くんスゴーイ！」

ざわざわと食堂中が一気に騒がしくなる。無理もない何せ今ニュースで名前が呼ばれたのが同じ学園の人間じゃあさ。

っと危ない危ない。折角の食事を吹き出す三秒前だったぜ……。にしてもあの馬鹿、目立つ男だなぁ。

あれと知り合いだなんて、人には言いたくない。絶対にだ。

本屋でのバイト仲間という繋がりしか無い俺だが、えらく風間翔一という男に懐かれていたりする。謎だ……。

結構な頻度で色々と遊びなんかに誘われたりするが、あまり仲良くはなりたくはない。———川神百代が所属するグループのリーダーだから。

詳しい事は知らんが仲がよろしいお友達だと自慢気に話してやがった、ジーザス、そんなの聞いてねえ。

気の良い男だと思っていたのにまさかの伏兵っぷりだよ。

……まあ別にどうでもいいや。飯が冷めちまう。食おう。

腹が減っては戦は出来ぬってね。

———しないけどさ。

第四話　道義心と臆病は、実は同じことだ。

川神駅前までの歩きなれた道程。学校での授業が終わりバイトへの途中にバッタリと遭遇したのだ。

「……」

眼つきが恐ろしく怖い後輩にさ。まあ別にそれだけならなんでもないのだが……。いや誰かに恨まれる云われは全く無いけどね？そんなモノさっぱり身に覚えもない。

「……」

……問題は、だ。

「……」

――真剣を携えている事なんだよね。ご丁寧に布に包んであるけどああいう物体って見慣れているから分かっちゃうの。

「あ、あの！」

「――真剣ですいませんでした。本当勘弁して下さい」

獅子は獲物を狩る時には全力を尽くす。それを目の前の般若の顔した危険人物は言葉に出さずとも教えてくれていた。

見るに下級生と思われる彼女は顔と体は最高級。黒く艶やかな長髪をした、一見すると大和撫子を体現する日本女性。しかし殺気をばら撒いて『あなた殺します』ってなオーラがヒシヒシと肌を刺すんですよ。

えーと。こういう場合は。

――――三十六計逃げるに如かず。

真剣で青春を謳歌したい！

第四話

道義心と臆病は、実は同じことだ。

多分選択肢を間違えていたらバッドエンドにまっしぐらだったぜ、俺。久しぶりに本気を出しちゃったよ、一生懸命死ぬ気で走ったなぁ。意外に簡単に撒けたけど今度から学校では日がな一日中神経を研ぎ澄ませて生きていかなくてはいけないのか……。

何故この様な仕打ちを受けなくてはならんのだ……。そうかきっと今俺の人生は大殺界に入ってしまったのかもしれん。細〇先生助けて下さい。え、あなた死ぬわよ？……人生とは己が切り開くものですよね。

まだバイトの時間には早すぎる、ならさっさと行って休憩室でまったりとエンジョイしよう。てな感じで現在俺は更衣室に備え付けられているパイプ椅子に座って絶賛だらけきっていたりした。

『ちーす』

『おお風間。テレビのニュース見たぞバッキャロー』

……どうやら英雄のご帰還らしい。店長と風間の会話が壁越しに聞こえるぞバッキャロー。

そうして少し間をおき休憩室の扉が勢い良く開かれ、噂の男、風間翔一が姿を現した。

「よう光臣！いやーお前って葱食べれたっけ？」

……なんだよ、葱って。さっぱり話の脈絡が見えんのですが……。

「埼玉ねぇ。その行動力は称賛するよ（無駄な事に関しては）」

「お前も来りゃ良かっただろ？風のように何処かにフラッと旅に出

るって最高だと思わねぇ？」

思わねぇ。そりゃお前だけだよ。

「これからは光臣ももっとグローバルに行こうぜ？この世界は馬鹿みたいに広くて飽きなんてこねぇよ！」

「……いや俺は結構世界中を旅した事あるし。確かアメリカ、中国、ロシア、イギリス、フランス――」

一つ一つ指を折りながら思い出していく。全部家の都合で引っ張りまわされただけだけど。

「……真剣でかよ！そんな話一度もお前の口から聞いたことないぜ！いいなぁー。俺も世界を股にかけて旅してぇー」

しかも移動は基本自家用飛行機で、お前が考えてる旅とは快適さや楽チンさが全く違うけどな。

まあ何だかんでやっぱり風間と話すのは楽しいんだが……不用意に深入りするのは、な。

「っておい風間、そろそろバイトが始める時間だぞ？」

「おおう、もうそんな時間か。んじゃあさっさと着替えるか！よーし今日もバイト頑張ろうぜ！」

――――翌日。

此処までは何時もの繰り返しなので省略します。あれです、布団でて朝飯食って身支度整えて登校中です。

変態橋には今日も愉快な仲間達が大集合っと思っていたら今日は一味違っていた。

道着に身を包んだ拳法家風の男が一人佇んでいたのだ。訝しがる周囲の通行人の視線などお構いなしに。

はたから見るとただの変質者だな、警察呼ばれそうな気がするがまあ良いか関係無いしね。

……多分、彼の目的は何となくだが予想できる。

――――武神、川神百代。

見た感じ結構出来そうな印象を持てた、がアレ相手では瞬殺ってとこかな。

足を止めずに先を急ぐ。興味も持てないし巻き込まれたくもない。

そうして橋を渡り切った時向こう岸の河原から喧騒が聞こえ始め

る、始まったか……。

数秒後一瞬だけケタ違いの強い気が感じられ、直ぐに収まった。

――まあ当たり前か。

勝てる訳ねぇよ、アンタじゃさ。

――拳法家さん？相手が悪すぎたね……。

「――てな訳なのよ。明智君はどう思う？」

「――そうだなぁ。俺は――」

……運が悪すぎるだろ。誰かに呪いでも掛けられてるんじゃねぇかな、と割と本気で最近思います。

さっきまで本日はバイトがなく自分の部屋でゴロゴロしていたはず……。んでふと退廃的生活の友ポテトチップスが恋しくなり近場のコンビニまで足を伸ばしたんだよ。

そしてお決まりのアメリカン生まれのコーラも欲しい病欲しい病に掛かってしまい、セットでご購入して……帰り道にまたバッタリと。

彼女、川神一子に捕まった。

「それで矢っ張りお姉さまはとっても強いのよね～。拳法家の人も正拳突き一発で倒しちゃうし」

そうかい。まあそりゃどうでもいいんだけどさ。その――――。

「私じゃまだまだあの練度の正拳突きは難しいなぁ……」

……腰に巻きつけてあるロープの先にチラチラと黒光りするモノ見えるんだ。もしやよくスポコンものに出演するあの御方ではないでしょうか？

「――――川神さん、えっとその腰に巻きつけたあるブツは……」

「えっ。ああコレの事？見たまんまだよ。――――タイヤ」

何を言っているの？とでも言いたげに首を傾げる彼女。そっか風間、ワン子の由来が少し分かったぜ……。まるで犬っころだよ仕草が。

……教育的指導をしなくてはいけないのではないのか、コレは。年頃の女の子がするべきファッションにしては奇抜過ぎる……。

見てくれは良いんだからもっと気を使えば化けると思うのだが……。いやこの状態でも十分レベル高ぇけどさ。

――――トレーニング方法としてもお世辞にも効率も良くないし、あれじゃ腰に過度の負担掛かる。

「……あのさ川神さん？迷惑で無ければ少し耳を傾けてもらっていいかな？実はもっと良いトレーニング方法があるんだけど――――」

何でもない日常が流れる。今まではそうだった。これからも当たり前だと確信していた。

自分が行動を起こさなければと、愚直に盲目に頑なに信じていたのだ。

だが、殻は必ずしも外から割れていくモノばかりでは無い。

――――内から割られる事などザラにある。

第五話　過去を思い起こしえない者は、過去をくり返すように運命づけられている

「……松風、あの人は何か急ぎの用事でもあったのでしょうか？」

ざめざめとひとり泣きする女の子が道路の真中にポツンと佇んでいた。

『まゆっち、ファイト』

偶然前方を歩いていた男の人が目の前で落としてしまった財布。気が付かないで歩いて行くのでただの親切心から声を掛けただけなのに……。

「私何かしてしまったのでしょうか？」

『オラが思うにきっと怖かったんじゃね？まゆっち他人と顔を合わせると鬼の形相を浮かべてるし」

「そ、そんな事はありません！」

ええそうです！そんな事はない、筈……です。

『まっ見るからに草食系な感じだったからなぁ。眼鏡掛けて貧弱そうな体付きだったじゃん』

ううう。何故威圧的になってしまうのか解りません……。

「……つ、次お会いした時こそはっ」

そ、そうだ、あの人は何度か学園でも見かけた事があります！まだチャンスは残ってるハズ！

それにきっとお金を落としてしまって困ってしまう筈ですし、必ずお届けしなければ！

「黛由紀江推して参る！」

「――ママぁ。あの人、一人で何喋ってるの？」

「――っし。指さしちゃ駄目。……ホラ、マー君行くわよ」

『……まゆっち、ファイト』

……馬の人形と喋る彼女の名は、黛由紀江。

後の時代に語られる明智光臣の頭痛の種となる人物である。

真剣で青春を謳歌したい！

第五話

過去を思い起こしえない者は、過去をくり返すように運命づけられている。

変化は唐突に訪れる。心の準備をする暇もなく。

「――今週の金曜日、２―Ｆに転校生が来る事になっているでおじゃる。川神の姉妹都市、ドイツのリューベックから、の」

ギラギラと地表を照らしていた太陽は姿を変え、幻想的な夕焼け空を演出する憎いヤツにイメチェンを敢行していた。窓から注がれるオレンジ色が教室を一杯に満たし色づけている。

「はぁ。で、それが俺に何の関係があるんですか？俺の所属するクラスは綾小路先生が受け持つＡクラスですよ」

「うむ、まあ話は最後まで聴くでおじゃる。その転校生、ドイツで中々に位が高い家柄の出身だそうで、の。出来るだけ問題は起こしたくないのが学校側の意向じゃ。……じゃが」

……その御仁はあろうことかあの問題児共の掃き溜め、２－Ｆに転入するって事か……。

あっ、今気が付いたがこの白塗り野郎、顔がオレンジ色に染まって何か――――気持ち悪いな。

「なら何で２－Ｆになるんですか？元からＳクラスとかの優秀で品行方正な連中とでは駄目何ですか？」

「お主の言う通り初めからそうすれば何も問題など無いのだか、の。……あの学園長が決めた事、逆らえる訳がなかろう……」

アンタが唯のへっぴり腰なだけじゃねぇかよ。

「――――まあこの際、事情はどうでもいいです。本題は何で俺がわざわざ先生に呼ばれるのかですよ」

「――――あれじゃ、あれ……世話係を頼みたいのだ、の」

「――――は？」

憂鬱な朝を迎え、今日も今日とて学園へ。いつもならのどかな（偶に通り道でスリリングな光景が目に入るが置いといて）登校のはずが。

「――っはぁ、っはぁ！！」

走る、駆ける、限界を超越するが如く。それでも走りながらチラチラと腕時計を確認するのを忘れない。

時計が指し示す時間は――――８時２５分。

後５分で――――遅刻決定。

「っ、糞、が、」

息も絶え絶えになりながらも懸命に足を動かす。ヤバイのだ、よりにもよって今日に遅刻はヤバイ。あろうことか今日の風紀委員の担当官があの鬼小島なのだ。

――――小島梅子。川神学園２－Ｆ担任。２８歳、未婚、恋人ナシというそろそ……あ、何でもありません。

彼女こそが通称鬼小島だ。

そう目の前にいらっしゃる、鞭を持って佇んでいるのがね♪

「――――待たんか。何を勝手に何事も無かったのように通り過ぎるのだ、お前は」

「……えっと、時間はギリギリセーフだと」

「確かに時間はまあ問題は無いな、だが」

……だが？

「遅刻ギリギリであるのに変わりはなかろうが、少しは反省の色を示す心を持て」

「――2－A明智光臣と申します。遅れてしまい申し訳ありませんでした」

綺麗なお辞儀、まるで教本通りの乱れのない礼をかます。……幼い頃からの教育の賜物ですな。

「――ほう……。うむ明智、通っていいぞ。やれば出来るじゃないか」

「……はい。失礼します」

足取り軽く校舎まで歩く。はぁ何とかなって良かったぜ、目を付けられでもしたらとんでもない。

『――それに比べて福本育郎、お前という奴はまた遅刻寸前に登校か……』

『――ウ、ウメ先生……』

甲高い悲鳴と鈍い鞭がしなる音が後方の校門付近から流れてきている気がするが。……まあ気のせいだな。うん。このご時世に体罰なんて在るわけ無いさ。

『――――うっ、い、痛気持ちいいぃぃーーー！！！』

変態どもが比較的多い、川神学園の朝は結構騒々しい。

――――グラウンドには全校生徒が整列していた。毎週水曜日には朝礼があり、この学園の学長からありがたーいお言葉を頂く。……ああサボりたい。

「ネムそうな顔をしとる奴が多いの。特に一年。まぁ朝だろうしの。こんな年寄りの言葉聞くためにわざわざ校庭まで出てきてご苦労じゃった」

しかし、壇上に君臨する爺さん。川神鉄心はそこら辺に転がってる爺とは全く別の生き物と言っても過言ではないのだ。

現在でも最前線であろうと通用すると断言できる――――最強。武術の総本山ともいわれる川神院のトップ。

「――――などと許すと思っていたか愚か者めらが」

爆ぜる。気が収縮され解き放たれる。

「たるんどる！　喝っっっ！！！！！」

周囲の空気がビリビリと振動した。だらしなかった者が慌てて、その態度を直す。

「皆聞く準備ができたようじゃの。良いぞ良いぞ」

つ～、着付け薬には強すぎだなこりゃ。でもお陰で否が応でも眼が覚めたわ。

「えーお前ら嫌なら勉強はしないでもいいぞい。４月もミドルになってスタディーがだるくなったと感じるヒューマンもおるだろう。したくなかったらせんでええ。――ふふ、若者語話しちゃったりして」

いやいや、それ若者というより、ルー大柴でしょ……。多分全校生徒の心の声は同じのハズだ。

「一度しかない学校生活。節度を保って好きにすごせや。人生は楽しんだもん勝ちじゃからのー」

まるで一学園を牛耳る長の発言とは到底思えん。流石川神学園、開放的すぎるまでのオープンさが売りだけはある。

「――ただお前達、腹は減っておるかの？名誉や金、力に飢えてはおらんか？女や男はどうだ？飢えておらんか？飢えているならそれはいい。とても正しい」

……俺は。

鋭い眼光を全校生徒に向けて川神鉄心の言葉が紡ぎ出されていく。

「どんどん飢えてハングリーになりなさい」

飢えることが必ずしも正しいとは限らない。終わりが来ない袋小路に追い込まれだってする。

「奪い取り、つかみ取るために努力しなさい」

奪い合いになってまで何を欲しがる。努力は時に自分を裏切りもする。

「競い合い切磋琢磨していきなさい」

競い合って絶対に何方かが落ちるのだ。切磋琢磨する先には絶対の成功が約束はされていない。

「そのために決闘というシステムも用意しとる白黒つけたければ活用しなさい」

白黒は付けてはいけないこともある。得るものがあれば失うもの

もある。

「そして”何か”をつかみ取って、みなさい」

……”何か”を掴み取れるのが全員では無い。決して……。

「勝つという快感はやめられんよ。人生はより楽しくなる。ワシからのオススメじゃ。成功する秘訣は夢ではなく野心ということよの」

知っているさ、勝利の味は……。野心と夢の違い……。

「といっても、ただ飢えるだけでは獣と変わらん。理性と本能を両立されて、楽しい人生を送ってくれることを願うぞい」

飢えるだけの獣、か……。

「なーんも飢えとらん、平凡で普通の人生を送るのが一番だと思う奴、それはそれでいい。精神は腐っていきそうじゃが、それも生き方よのぅ」

視線が交じり合っているような錯覚に陥る。……負けじと睨み返す、信念は間違っていない事を誇示するように。

それが賢い生き方だ。一番自分の為に世界の為になる。

時間は巻き戻せはしない、決して、だ。

「ただ、その生活をするにも、ある程度の学力と健康な体が必要だ。今のうちに鍛えておきなさい。願わくば、皆が何かしらの野心を抱いた飢えた若者であることを願うぞい。以上じゃ。ファンレターは目安箱にいれてくれ」

川神鉄心が背を向けて去る。

痛みを覚えて視線を移すと知らずに拳を握り過ぎていたようだ。手のひらを見ると少しだけ血が滲んでいた。

鮮血は簡潔に自分が人間で有ることを証明してくれる――――。

赤い血がこの身を巡っているのだと――――。

第六話　心は小ならんことを欲し、志は大ならんことを欲す。

『――――光臣。お前は私の自慢の息子だ』

『――――おぉぉ……。この者こそ、正しく神童じゃ……』

『――――流石ですなぁ。明智家も安泰でしょう、これほどの未来の偉人に恵まれて居られるのだから』

懐かしき子供の頃は一分一秒でも早く『大人』になりたいって、四六時中願っていたものだ。

よく子供が当たり前の様に口にするフレーズ。

幼い頃の自分も例に漏れずにそうであった。

『大人』にさえなれば、自らを取り囲む全ての問題が瞬く間に解決すると根拠もなく確信していた。

周囲の期待にも現状以上に答えられるだろうし、もっと自分の価値を皆に知らしめる事が出来るだろう。

喋ったことにも無い他人達からも表では無意味な賞賛を受け、影

では手のひら返しの餓鬼扱いをされずに、本当の意味で一人前の一人の人間として対等に扱われるようになるのだと。

頭も良くて、力もあって、何事に対しても己一人で進める。

――『大人』というやつに。

だからこそより一層の努力も怠らず、前だけを向いて我武者羅に己の信ずる道を邁進したのだ。

才能があった。

天賦の才能が。

唯の有象無象共を遥に凌駕するほどの。

だから――明智光臣は確信していたのだ。

神様というモノがもしこの世の何処かに存在するならば、きっと明智光臣はソレに愛されている。

転落することなど微塵もありえはしないのが、我が人生であると――。

真剣で青春を謳歌したい！

第六話

心は小ならんことを欲し、志は大ならんことを欲す。

気怠い朝。
目覚めの悪い悪夢を。
……いけ好かない夢を見ていた気がする。

遥か昔、幸福が最も近かったと感じられたあの日――――。

「……くそっ」

まだ昨日の言葉を無意識に引きずっているのだろうか。
知らず歯を食いしばり、軋む音が内から響いてくる。

――――などと、自己分析をできる程度には頭も起動を開始しているらしい。

『――――なーんも飢えとらん、平凡で普通の人生を送るのが一番だと思う奴、それはそれでいい。精神は腐っていきそうじゃが、それ

も生き方よのぅ』

……何も知らない奴が気軽に言ってくれるもんだ。

あの爺さんはきっと今まで人生を生き、躓いたことなど皆無なのだろう。

なんせあの川神院の宗主であり、世界でも指折りの実力者。

―――敗者とは一線を画す存在だ。

「……っ何時までも引きずんな」

小さく自らに呟く程度の言葉を漏らす。

―――切り替える。先を見据える。前に進む。

……それが俺の正道。

辛気臭い顔をしているであろう顔面めがけ張り手をかます。

パンっと肌を打つ音が部屋に木霊し、手の平に隠れた顔は―――前を見据えていた。

何時もより少し早い時間に家を出る。

気分転換も兼ねながら、のんびりと登校と洒落込んだ。

陰惨な気分を打ち払うかのような晴天に恵まれた早朝、道行く人々も活気ある様子で朝を迎えていた。

「―――ふぅ」

朝の新鮮な空気を胸一杯に満たし、吐き出す。体の中の溜まった

膿を全部出しきる。

――――イメージは心臓から血液を全身に巡らせるかの様に。目を瞑り漆黒の夜空に星を思い浮かべる。陰と陽が混ざり合う。

……まあこんなモノは根拠なんてない呪いだが、昔から気持ちの切替には重宝して手段でもある。

『――――始まりの朝は体の内側から清浄な気を満たし、終焉の夜は混濁の気を外に吐き出させてくれるものだ』

――――ん？　そういえばコレって昔に誰かが言っていたんだよな。確か？

誰に対しての質問なのか、何故か疑問形で思い出に詰まってしまう。

……思い出せん。確かに誰かから教わったって事だけは覚えているのだが。

親父はあり得ないし、母は論外だよなぁ。他に思い当たるのは……。

一人で歩道の真ん中で首を傾げる男子高校生。

きっとかなり周囲から浮いているであろうことだ。

……運の良い事に周りには人の気配が無いのが幸いだったようだが。

腕を組み唸り声を上げながら歩行を続ける。

考えを巡らし、答えを探求する。

――――それも、答えが己の中にあればの話だが。

……。
……。
……。

「……うん？」

――――気が付くと見知らぬ路地に迷い込んでいた。

「……あちゃぁ」

乾いた笑みを張り付かせ、自らの学習能力の無さに愕然とするしかない。

……やってしまった。が、なんとコレは意外と偶に良くある行動だったりするのだ。

一つの事に集中すると周りの一切が目に入らなくなってしまうことが、タマ～にあったりなかったり。

――――そういえば何を考えていたんだっけか？　……あれ？　何だっけ？

……言いたかないがもしかすると俺って夢遊病の一種を患ってい

るのかもね。

「って馬鹿な事考えてないでさっさと道を探さなくちゃな」

この川神市に住み始めて早一年も経つが、ぶっちゃけ未だにあんまりこの街の構造なんかにはさっぱりと疎かったりするモノである。

……だって、わざわざ外に買い物に行くより、ボタン一つのネット通販最強じゃね？　割りと真剣でさ。

「……さっぱりだ」

……無駄な努力は重ねても結果は付いて来ない。

見たこともない道を当てもなく彷徨う事数分、無闇矢鱈に歩かないほうがいいという結論に至る。

どうしようもないか、もうこうなったら出会う人全てにでも道を訪ねて教えを乞おうと心に決める。

……のだが先ほどから全く通行人ともすれ違わないのだ。

もしかしてココら辺は人通りの少ない路地なのだろうか？

『――――っ』

溜息を吐きながらトボトボと歩く。

……恐る恐る携帯の時刻を確認すると――――後幾許かの猶予も残

されていない事実が現状を悪化させてくれる。
タイムリミットは後わずか……。
これってもしかすると遅刻のフラグが立っているのか……。

『――っっ』

ていうか確か記憶が正しければ今日は人間力測定の日だよなぁ……。
まあと言っても、ぶっちゃけ言うなればただの身体検査とスポーツテストなんだがな。

でも――ああ、動きたくねぇ。
主に体が疲れるのはＮＧだ。
金銭でも関わればやる気も段違いなのだが……。

『――っっっ』

――ん？

『――や、やめて下さい！』

――なんか、聞こえるような？

『――んだよ。そこの餓鬼がぶつかってきたんだよ。てめぇは関係ねぇだろうが！！！』

……あ～。なんだかイヤーな空気が前方の曲がり角から漂ってきているなぁ。

「――僕の七浜ベイスターズの帽子返してよぉ！」

「そ、そうです！　この子にその帽子を返して上げて下さい！」

「……七浜ぁベイスターズぅ？　……ってあぁ、あの最弱っていうプロ野球チームのかよ」

心情的には見たくも無いし関わりたくもないが致し方ない、なんせやっとの思いで見つけた第一発見者だ。

遠くから様子をみて、面倒臭そうだったら――さっさと逃げよう。

「――なぁ、タク君。その汚ったねぇ帽子なんてさっさと捨てちまえよ～」

「ははは！　それもそうだなぁ！」

ああ、絶賛面倒臭い場面だなあれは。

――見て見ぬ振りだ。余計なお世話だろう、だってあの制服を見るからに……。

「ち、ちょっと！　可哀想でしょう！」

あの子供庇っているのは我が校の生徒だし、まあ問題無いだろう。うん……きっと大丈夫さ。

昨日の子も女の子だったけど、あの子も女子かぁ。

今年の一年もレベル高そうな気配だなぁ、しかも主に女の子が。
刀の娘は流石川神クオリティだったからなぁ。出来ればもう絶対に関わり合いになりたくない。

「――はぁ？　あんな最弱球団なんて応援してるこの餓鬼の為だよ、コレはぁ」

遠目に見てもハッキリと分かるガラの悪そうな二人組が女の子と小さな子供をいびっている構図がそこにあった。
単純明快で宜しい。

――さて、遅刻覚悟で道を探すとしますか。

「――世の中、雑魚より強者に付いた方が得だってなぁ！」

醜悪そうな笑い声が離れた俺の耳にも聞こえてくる。

――嘲笑は忘れ得ぬ傷跡を残して。古傷を掘り返されたかのような錯覚に陥る。

『――光臣よ。世の中には』

――昔の教えが頭を過ぎる。

『採取される側と――』

――――自ら否定し、飲まれた教え。

『搾取する側の二通りの人間しか――――』

――――知らず足が無意識に動いていた。

『――――おらんのだ』

――――この川神に来て初めて、自分の意志で、動こうと思ったのだ。

過去と今では違うという現実を。

少しばかりの触発が最後の関を打ち破る糸へと変わっていた。

なんて……自分を誤魔化す術に長けている自分が少し可笑しかった。勿体つけた口上は己の鎖を緩める為。

始めから分かっていた、あの一年生に武術の心得が無いのは。

――――怯えた瞳、震えた唇。

少し位、腕に覚えがあればあの様な体裁を晒したりはしないものだ。

……それも偽っているのならかなりの実力者だけどさ。

――さてと、流石にか弱い女性と無垢な子供を見捨てる程腐りきってはいないさ。

第七話　貨幣は私の力をあらわす。

「――クリスティアーネ・フリードリヒ！！！」

朝、運命が動き出す一日の始まりは騒がしく幕を上げた。
いつもの退屈なＨＲが始まる時間にソレは唐突にやって来た。

「ドイツ・リューベックより推参！！！」

どう考えても時代錯誤がはだはだしい彼女は白馬に跨りながら雄々しく宣言する。
教室中の生徒達が一斉にざわつき始め、教壇におわす綾小路でさえも呆然と言葉を失っている様がまじまじと確認できた。

「この寺子屋で今より世話になる！！！」

白馬に乗り、風にたなびく金髪が美しい。
ああ――アレが俺の世話する御方か。

若干の不安を覚えながら呆けた顔で窓から彼女――クリスティアーネ・フリードリヒを眺めていた。

真剣で青春を謳歌したい！

第七話

貨幣は私の力をあらわす。

あの朝の一件後大急ぎでＨＲを中断し、教室を出ていく似非公家の白いヤツが一匹。

黒板には自習の文字が大きく殴り書き、生徒達はソレに習い無関心に各々勉強を始めていた。

クリスティアーネ・フリードリヒはあの後、この学園中でも選りすぐりの変態九鬼英雄と邂逅し、何やら感激した顔で騒がしく校舎の中に消えていった。

転校生は女。

予め綾小路から話は聞いていたが、情報が正しく、安心して胸を撫で下ろしたモノだ。

風間が提案し、実施していた賭けとやらに多少の金を積んでおいて正解だった。

あまり期待していなかったが、レートのお陰で結構な額になりそうだ。

……楽して稼ぐのはいいな。にしてももう少し多めに賭けておけば良かった。

がめつい考えを張り巡らしていると、有ることに気が付いた。

――そういえば彼女は２－Ｆなんだよな。
……もしかするともう一度、稼げるかもしれん。

「――今より第一グラウンドで、決闘が行われます。内容は武器有りの戦闘。見学希望者は第一グラ……」

――どうやらドンピシャらしい。

「朝飯用の弁当いがかっすかぁ！？」

……本当ここの学園の連中は商魂が逞しいことだ。
トトカルチョもさる事ながら、何かにつけて対応が早い。

グラウンドには大勢の見物人が集まってきていた。
まあその内の一人である俺が言えたことじゃないけれど。
本人達の希望があれば見学不可にも出来るが、他のクラスや学年の違う連中も面白がって集まってくるのでお祭り状態だ。

……俺の所属する２－Ａは俺以外見物に来ていないがね。
本当、成績第一な連中だからな。でもまあそれが本来の学生のあり方かね。

「ほい、クリスティアーネさんに五万だ」
「おおう。大胆に賭けるなぁお前。ワン子を舐めて損してもしらねぇぜ？」
「まあ稼げる時稼がなくちゃな、ハイリスク・ハイリターンだよ」
いつの間に持ってきたのか机を並べてメガホンで宣伝をしていた風間を見つけ、俺も賭けに参加する旨を伝え、福澤諭吉さんを五枚渡す。
こいつも中々に順応能力が高いなぁ。
……ま、川神さんには悪いが、今月は稼がせて貰いますよっと。
「んじゃあまたな。俺は観戦してくるとするよ」
「おう。クリスを応援するものいいがワン子も応援してやってくれよ！　お前に懐いているみたいだかんな！」
――――適当に手を振って別れを告げる。
ごった返す人ごみに隠れながら先に進む。
……あんまり目立つ行動は避けたいが為、本当なら教室で寝ていたかった。
金の誘惑には勝てなかったがね。
……一応戦いも見てみたかったけどさ。
昨日の一年生に見つかるのは色々と危険だし、あの刀少女も頭にチラつく。

出来るだけ慎重に行こう。
石橋を叩いて渡るどころか、石橋を叩き割って渡る心づもりでだ。
『――――上玉キターーー！！！』
近くに人混みから百獣の王の雄叫びが聞こえてくる。
どうやら興奮状態のようだ。
……猛獣も彷徨っているしね。

時が満ち決闘が執り行われようとしている。
グラウンド上には薙刀を持った川神一子と。
レイピアを構えるクリスティアーネ・フリードリヒの姿。
周囲の観客から双方熱い声援を送られ、場のボルテージも徐々に高ぶりを見せていた。
（――――薙刀とレイピアか、ある意味勝負は決まったも同然……）
熱狂する群衆から少し距離を置きながら、決闘の先行きを見守る。
……武器の優劣からして不利有利は既に決まっている。しかも相手は転校生、きっと川神さんは少しばかりの油断をしているだろう。
反対にクリスティアーネさんは川神の名で警戒心を持って戦いに望む事は必定――――俺の眼から見ても明らかな差。
……根本的な話、性格的に勝てなさそうだな、短気と慎重は相対するし。

「――――これより川神学園伝統、決闘の儀を執り行う！」

決闘者の間に座する川神鉄心が口上を述べ、一層賑わいを見せ始める。

「二人とも、前に出て名乗りをあげるが良い！」

「2年F組　川神一子！」

「ワン子頑張れーーーーーー！！！！」

「大和撫子の力を見せてやれ！！！！」

「今日より2年F組！　クリスティアーネ・フリードリヒ！」

「クリスちゃーーーん！　気をつけるんですよー！！！！」

「期待してるぞ新入りーーーっ！！！！」

「ワシが立ち会いのもと、決闘を許可する。勝負がつくまでは、何があっても止めぬ。が、勝負がついたにも関わらず攻撃を行おうとしたらワシが介入させてもらう、良いな？」

「承知したわ！」

「承った」

……此の場の人間の思いは一体どちらが勝つのか。

長い付き合いの川神さんの戦闘力は大体図れるけれども全力や実戦になればまた違う筈だ。

でも――――。

「いざ尋常に、はじめいっ！！！！！！！」

スピードの戦いになるのは目に見えている。

女性同士の戦いなら尚更。

……二人ともがゴリラみたいな体格なら話は別だが。

「勝負っ！」

「いっけぇぇぇぇーーー！！！！」

勝つのは――――。

川神一子が鋭く薙刀を振り回す。

――――クリスティアーネ・フリードリヒだ。

第七話　およそ小児の教えは早くすべし。

――一方的な斬撃の嵐。
休み事無く薙刀は振るわれ続ける。

踏み込み、小手を放つ。
いなし、刃を滑らせて袈裟斬る。

隙を伺う事はせず、一拍の間を取らせる事を是とはさせない。

一方、相対するクリスティアーネは金髪を踊らせながら、華麗に攻撃を避け続けていた。

真剣で青春を謳歌したい！

第七話

およそ小児の教えは早くすべし。

「いい感じだよワン子、そのままそのまま！！！」

「行けーっ、押せ押せ押せーーーっ！！！」

川神一子の優勢は誰が見ても明らかだ。

一方的な展開が繰り広げられ、勝敗が決するのはそう時間が掛からない――――。

「クリスちゃん、しっかりーーー！　あ、でもワン子ちゃんも頑張って！」

声援は優劣を見て、その言葉をそのまま発せられる。

襲い掛かる川神さんの攻撃に、後退していくクリスティアーネさん。

「どーしたどーしたっ！」

「っ！」

軽い挑発を浴びせられ眉を顰める金髪の彼女は――――。

「かかってきなさいっての！」

（クリスティアーネさんの目もそろそろ慣れてきたかな。……仕掛けるか）

「やーっ！！！」

――――瞬間、閃光が奔った。

レイピアの刀身は穿つ用途に特化している、その攻撃速度は薙刀とは比べられるモノでは無い。

「！？　迅いっ……」

――――しかしソレをすれすれで回避に成功する川神さんもやはり川神院で修行をしているだけはある。

一般人では線を追うことで精一杯であろう。

仕切り直しとばかりに大きく間合いを取り、息を整える川神さんの姿。

グラウンドに集結している野次馬達は、クリスティアーネさんの攻撃速度に驚き静まり返っていた。

「おおっ、すっげぇ！　二人ともやるなぁ！」

「今……攻撃したんだよな！？　突いたよな？」

……聞き覚えのある声も驚きに満ちていた。
ざわざわと一層、先程の攻撃について驚きが波及していく。

――クリスティアーネさん、か。
ある程度の実力である踏んでいたけど、少し予想を超えていたかな……。

元来レイピアとは刀身が細すぎる為、普通に斬っても、下手に突いても、曲がったり、折れたりする事が多く、余程の腕で無ければ実戦で使用はしない。

しかし――それ故擦れ斬りなどの刀身に負担が掛からない剣術が発展してきた。
即ち、彼女の剣術は――。

「――続けて行くぞ。次で仕留める」

「上等よっ！」

売り言葉に買い言葉と言った所か。
必勝の宣言に対し、自らも必勝の宣言を返す。

「せいやーーーっ！！！」

器用に薙刀をクルクルと高速回転をさせ始める川神一子。
縦横無尽に奔る刃はどこから飛んでくるのか分かりにくい。

「……これはっ……！？」

クリスティアーネは眼を見張り、構えを凝視する。

――体中の筋肉を緊張させ、直ぐに行動に移れる予備動作を図っているのが見て取れた。

（――遊びと実戦の差かな、今回は）

――クリスティアーネ・フリードリヒの剣は、実戦を想定して動いていた。

「川神流――」

薙刀を大きく頭上に振り上げ、そのまま頭へ強烈な振り下ろしが――。

「山崩し！」

――放たれる事は無く。

予測とは異なり、薙刀の刃筋は斜めに流れ――。

クリスティアーネさんの“脚”へと振り下ろされた。

「！！！」

此処で余談だが、フェンシングの有効部位は胴だけであり、薙刀は脚すらも攻撃できる。

脚への攻撃に不慣れな人間ならば間違いなく、あの“すね技”を食らうことを避けられないであろう。

川神一子の思考は、間違っているわけではなかった。

（――ただ）

「ふ！」

（――甘いんだよな）

たった一つの誤算が――。

「避け……！？」

「――セェイ！！！！！！」

弓を連想されるかのように、腕を引き絞り線を描く。

勿論その点は――。

「ぐあっ！！！」

――――フェンシングには全身有効な種目があり、クリスティアーネはソレが専門だったということ。

鮮烈な突きが川神さんの肩部に炸裂していた。

「〜〜〜っっっ！！！」

かなりの激痛が襲っているであろう。肩を抑えながら呻く姿が。

……多分に悔しさもいい具合にブレンドされているのだろうけど。

「それまで！　勝者クリス！！！」

勝者と敗者の判決が審判から下される。

「ウォースゲー！　スゲー試合だった！」

「何が起こったのか分からんがとにかくスゲー！」

見守っていたギャラリーからドッと歓声が沸き上がる。

「フム骨は大丈夫じゃな。しばらく痕は残るがの」

「それは良かった」

「くっ……ぅ」

「……ふ……ふふふふ……ふふふふ」

――何だか不吉な呟きを唱えているらしい。

目が座り、ジッと視線をクリスティアーネさんに固定しているようだ。

「アンタは黙ってなさい！」

周囲に集まってきた友人から何か言われたのか、川神さんは近くの男子学生目掛けて吠えていた。

「面白いわねクリス……本気でやろーじゃない！」

川神さんはおもむろに両手に着けていたリストバンドを外――――ってあれは、まさか！

――ソレはズンッ、という音を立てて地面に落ちた。

「な……あのリストバンド何キロあるんだ？」

「今まであんなハンデで闘っていたというのか！？」

ギャラリーは先程までの闘いはハンデがありきのモノだという事実に驚きを隠せずにいるようだ。
……俺も驚きを隠せないぜ。

（……あぁ。まさかこの間タイヤの代わりに薦めたアレを付けっぱで闘っていたなんて）

哀れなような可愛いような複雑な心境で川神一子を眺める。
まさに忠犬だ。教えを忠実に守っていたとは……。
――何か胸が痛いなぁ。
……金はガッポリ儲かったけれどね。

「――さぁ。第二ラウンドと行きましょー……」

「――あほっ！　すでに勝負あったわ！」

涙目になりながら本日のワン子は釈明を始めていた――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9866w/

真剣で青春を謳歌したい！

2011年12月12日00時47分発行